

# 第1分科会

## いのちの大切さを学ぶ保育

生きていること自体が奇跡であり、生きていること自体が尊いことであることを、幼児自身が実感できるような保育とはどうあるべきなのでしょう。

ディレクター	山中 敦子（ときわ幼稚園）
司会者	福田 教子（有緝こども園）
運営委員	杉山 一夫（うぬま第一幼稚園）
話題提供園	森 静香（すずか幼稚園） 河村 倫子（すずか幼稚園）
助言者	西垣 吉之（中部学院大学 教育学部子ども教育学科教授）
分科会担当責任者	田代 紀美子
会場	富山県民会館401号室
参加人数	81名

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。家庭形態の変化に伴う子育てへのストレスや過保護・無関心、情報の氾濫からくる育児への不安や迷い。インターネット・ゲームなどによる子ども同士の遊びの実体験不足。また、地域社会においても人と人とのつながりが希薄化し、様々な人と触れ合う経験が少なくなっているのが現状です。家庭教育力の低下も叫ばれる中、子どもたちの健全な生活の確保が危ぶまれています。

いのちの尊厳が軽視されるような事件・報道も年々増加している状況の中で、大切な子どもたち一人一人が、その子にふさわしい生活を送り、自分の人生を主人公として生きていくために、私たち保育者ができることは何でしょうか。

自分を愛し、他を思いやる豊かな「こころ」、いのちの大切さを学ぶ保育について考えていきたいと思えます。

研究の手がかり

- 自分が大切にされているという実感を、周囲の大人（保育者）のどのような働きかけや援助の中で感じていくかについて考えてみましょう。
- 生きていること自体に喜びが持てるようになるために、保育において大切にしていくことについて、実践を通して考えてみましょう。
- 周りの子どもたちとの関わりを深めながら、相手の気持ちに気づく過程について、実践を通して考えてみましょう。

## 「Hくんの成長を願って」

すずか幼稚園 副園長 河村倫子 教諭 森 静香

### ◎テーマを捉えるに当たって

第1分科会のテーマ「いのちの大切さを学ぶ保育」とは



自己肯定感(自尊感情)が高い状態を示している

- ・自分自身を好きだと感じ、自分自身を大切に思える気持ちが強いこと
- ・自分がかげがいのない存在だと感じる
- ・自分をきちんと評価し受け入れること
- ・自分の意見をしっかり言えて自己決定できること
- ・人間関係の中でしっかり生活していると感じること



「自己肯定感の基礎を育てるにはどうするか」を考えていく

### ◎Hくんについて

年少の9月から途中入園、落ち着きがなく嫌なことがあると大きな声を出して教室を飛び出す一人っ子で父母と生活 Hくんの自由を尊重する育児方針  
両親の本児への期待は高いが褒めることは少ない⇒自己肯定感はかなり低いように感じた

### ◎Hくんの園でのエピソードから

エピソード1(年少)…保護者の育児スタイル→園の取り組みや様子を伝えてもあまり理解してもらえない

エピソード2(年中)…支援に向けての連携開始→運動会でのHくんの様子から状況を理解する

市の専門機関に相談にかかる

エピソード3・4…クラスでの取り組みの様子

エピソード5…自分の短所を理解しているHくと保護者の変化→Hくんを認めている様子を強く感じ、否定的な表現を肯定的な表現に変えてきている様子がうかがえた

### ◎就学に向けて「幼児期の終わりまでにそだってほしい10の姿」より

Hくんの年長現在の姿から今後の育ち、課題を10の姿より捉えていく

### ◎まとめ

Hくんの自己肯定感の変化

- ・自分自身を大切に思うようになった→自分自身を好きだと感じ、自分を大切に思える気持ちが強いこと
- ・「僕は必要とされていない」と言わなくなった→自分がかげがいのない存在だと感じる
- ・自分を認めてほしいと考えるようになった→自分をきちんと評価し受け入れること
- ・建設的な意見を発表できるようになった→自分の意見をしっかり言えて自己決定できること
- ・みんなと遊ぶために努力している→人間関係の中でしっかり生活していると感じること

## ◇質疑応答◇

- ①三井先生（三重県）：H君が落ち着ける場所として段ボールのシェルターを作っていたが、かかわりが難しかった保護者の方の理解が得られるまでのやり取りはどのようにしてきたのか。
- すずか幼稚園：シェルターを実際に見て頂き、「このようにしています」と伝えたところ、「本人が入りたいのであれば大丈夫」との返答があった。
- 助言者：シェルター＝居場所と置き換えたほうがよい。どの子にも居場所は必要である。それが、場所であるか物であるかは、その子によって違う。どの子にも居場所が必要であることを大前提とし、そこからアプローチしていくことで、保護者が納得する材料になるのでは。
- ②松森先生（愛知県）：H君のシェルターに対して、周りの子供たちの反応、その時の先生の援助や言葉かけは、どのようにしたのか。
- すずか幼稚園：H君のシェルターに興味を示し、場所の取り合いになることもあった。H君のシェルター以外にも、何か所かシェルター（居場所）を作り対応した。
- ③甲賀先生（静岡県）：H君のようなネガティブな発言をする子に対して、その子が安心するために、どのようにスキンシップをしたり、声をかけたりして気持ちを落ち着かせてきたのか。
- すずか幼稚園：朝と帰りには必ず声をかけ、スキンシップをとるようにしてきた。朝は、必ず名前を呼んで、一声かけるようにしてきた。帰りは必ずハイタッチやスキンシップをして笑顔で帰すように心掛けた。
- ④中村先生（三重県）：H君に対しての職員間の連携、職員の体制などはどのようにしているのか。
- すずか幼稚園：副担任やフリーの先生に協力してもらったり、職員会議で報告したりしている。フリーの先生が困っているところを手伝う体制になっている。  
また、支援コーディネーターという職員を設け、担任が困っていることを市の支援課に相談していく。

## ◇グループ協議◇

※グループディスカッションの柱①・②のどちらかについてグループで話し合う。

※8グループに分かれ付箋を使い意見を出し合う。

- ① 自分が大切にされているという実感を周りの大人のどのような働きかけや援助、手立ての中で感じていくのか？**
- 1 グループ：大切にされていると感じるとき・大切にされていないと感じるときを分けて考えた。大切にされていると感じるポイントは、自分自身を見てもらえると感ずること。大切にされていないと感じる要素は、話を聞いてもらえない、冷たい対応が子供に伝わり悲しい気持ちになっていくのではないかと話し合った。
- 2 グループ：子供が大好きという気持ちが大切。目を見て話す特別感やスキンシップの大切さについて話合った。また、認めたり共感したりすることで、子どものチャレンジ精神や自信につながっていく。
- 5 グループ：大切にされているという実感を持つためには、褒める・見守る・認めるということが大切である。半面、じっくりかかわる時間が取れないという課題も見えてきた。
- ② 子どもの育ちに関与する親が、親として育つために必要な幼稚園・こども園・保育者の役割について考える。**
- 4 グループ：①情報発信②保護者対応③信頼関係④保護者同士のつながり⑤子供の見守り⑥園内研修の6つに分け、情報交換の大切さについて話し合った。
- 3 グループ：保護者同士の交流場所の提供も幼稚園の役割ではないのか。交流会やビデオトークをしている。
- 6 グループ：職員間の連携、子育て支援、親同士の交流について各園の事例を話し合う。また、親への情報発信は、一方的ではなく一緒に考え、寄り添っていくことが大切である。
- 7 グループ：家庭環境の問題、支援が必要な子供の保護者の対応、保護者のマナーについて、様々な問題点が見えてきた。その親に対して、根気よく繰り返し伝えていくしかない話し合った。

8グループ：教育の必要性。教育とは、勉強だけではなく生活面などについても保護者会で伝えていく。その方法として、講演会を開いたり、子育ての経験を交えながら保護者に伝えたりする場を設ける。

西垣先生助言より

### 個と集団の狭間

一人一人の子どもの歴史、育ち、課題、興味、関心に応じていくことが保育の基本であるが、周りの子どもと共有の思いをもって活動を進める喜びをもてるような育ちを期待する。保育者は個と集団の狭間で悩み、葛藤することが多い。悩んでいる保育者こそしっかりと子どもに寄り添っているとと言える。

### 「ぼくなんか、ぼくのは好きじゃない！」という子どもの言葉

～ふりかけ事件（西垣先生事例より）～

5歳児I君はお弁当のふりかけを忘れてきたことを立ち直れない。周りの子は「ぼくのあげるよ」と次々にI君のごはんに自分のふりかけをかけてくれるが、一度折れた心は立ち直れない。I君を抱きかかえホールの裏へ行き「みんな親切だね」と言うと「ぼくなんて、みんな嫌いなんだ！」と。まるで赤ちゃんが身をゆだねるようにして先生の肩で泣いた。保護者は園でのI君の姿を「信じられない」と。I君の父は出張が多く、母は多忙で体調を崩すことがある。家でI君は母のために一生懸命手伝いを頑張っていた。家でI君は頑張り、背伸びをしていたが、園では幼児性をちゃんと出せていた。子どもが育つ上で、その時期の子らしさ(甘え、わがまま、やんちゃ)をちゃんと出せることが一番大切である。それがその子にとって踏まなければならない育ちであり個別の支援計画となる。

### すねるということの意味

発達上とても大切であり、「すねる」とは、強く周りを拒否する姿勢ではない。周りの子から否定されたくないという思いが生まれたからであり、周りとの関係性が築かれてきたということである。

### 言葉にこだわって子どもの発達を読み取っていく

話題提供園H君の集団あそびの事例より、エイエイオーの掛け声の場面の「団結力」という言葉は、「みんな同じ言葉を口ずさんだり、同じ声をかけたりすることで、子ども同士の気持ちが繋がる瞬間が生まれてくるようになった時期である」と表現することができる。子どもを柔らかにしなやかに捉え、その発達を丁寧に読み取ることが大切である。仲良く遊べるようになる子どもの姿までには人間関係の複雑な姿があり、その過程でグチュグチュゴチャゴチャがあることを自覚し、その時期を持ち堪えることが保育者の専門性であり大切な営みである。

### 振り回されることの意味

H君は0～3歳まで子どもらしさ(自我)が満たされていなかった。子どもは、大人を振り回し、自己効力感(生きていいんだ)を得る。自己効力感が無い子は引きこもりやいじめ、不登校、家庭内暴力などで大きくなった時に人を振り回す。幼児期は大人を振り回し、自己効力感、生き抜く力を育てていくことが大切である。

### 気になる子は本当に気になる子なのか？

何かを発信している子は、気にしてあげないといけない子である。保育は集団で動くので比較してしまうが、見方を変えると知恵を使い、自分の要求を周りに伝える能力、危機管理能力、生き抜く力を持っていると捉えることもできる。子どもをとらえる際、両義性で否定されがちな姿の裏には育ちがある。

### 感情をコントロールする力

自分の感情とうまくつきあうことができない。自分の感情の動きを見つめることができない。いつまでも不快感情から立ち直れない子どもたちは、感情にゆっくりつきあってもらう体験、自分の感情をおさめてもらう体験、気持ちが乱れたときに、他の物事に気持ちを向けて気持ちを切り替えることのできる体験が少なかった。感情は切り替わるから生きていくことができる。

### 保育の魅力

保育は持ち堪えること、それが楽しい。いつまでも子どものことが解ったと思えないということである。混沌としている子ども達の生活や遊びを紐解こうとしても、なかなかわからない。そのわからなさを持ち堪えること、保育はわからないからこそ楽しい。

### 子どもの発達保障を促すための保育者・園の役割

保育者は気になる子どもに対して「こうせざるを得ない」という切羽詰まった関わりをすることがあるが、その関わりにも重要な意味がある。こうした姿勢を保護者にも分かってもらうことで、保護者との信頼関係を築くことができ、それが保護者の本心に触れるきっかけになることがある。そのための基本は子どもが育っていく力を信じることである。